

2 「ホーム」のイメージ

「お帰りなさい、ご主人様とお嬢様」我々はこの家庭的な挨拶により秋葉原のメイドカフェに迎え入れられた。現代の日本のポップカルチャーの象徴の一つであるこの類の店は、客に「ホーム」や「帰宅」の感覚を提供してくれる。初めて体験する外国人にとってはとても奇異な印象で混乱させられるが、数分後にはよく理解することができた。こういうもてなし、演技、その全てが軽い愛撫を持つ雰囲気をつくるためにある。メイド達はとても

* 本稿は英語で提出されたものをジョン・サイモン（2005年度COE調査研究協力者）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。

フレンドリーで、笑顔を絶やさず、そのコスチュームと同じく実際の家族、妹分のようなものである。

メイドカフェは今回の旅の中で最も衝撃的なイメージの一つであった。その思わぬ光景、ヨーロッパのメイド衣装とアットホームな雰囲気に、世界的に反映し拡大する、多様な日本ビジネスの哲学を感じ取ることができた。（唐沢ダニエラ氏は2006年12月2日～12月18日まで訪問研究員として来日された。）

REPORT

REPORT

REPORT

REPORT

REPORT 5

訪問・派遣研究員によるレポート

REPORT 6

心はウチナンチュ

グラウジョール・カルロス（サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・日本文化修士課程） GLAUJOR Carlos

私は今年からサンパウロ大学の修士課程に入り、ブラジルで創作エイサー（琉球國祭り太鼓）の活動をしている沖縄系の人々の帰属意識について研究している。

神奈川大学COEプログラムのお陰で、私はJICA横浜移民資料館や、成城大学、武蔵大学、慶應義塾大学などの機関に調査研究に赴き、各機関の研究者や先生方に私の研究分野に対する知見を伺うことができた。

神奈川大学図書館で見つけた沖縄の文化・民族性・独自性などに関する資料と、諸先生方の手助けのお陰で、今回、随分と研究を進展させることができたと思う。

東京と横浜では、それぞれの支部の創作エイサーの活動に参加し、ただの見学者としてではなく一緒になってエイサーを楽しんだ。

10月7日には、琉球國祭り太鼓東京支部が出演する「四谷大好き祭り」を見に四谷へ行き、そこでは支部の団員の方々と交流することができた。

横浜では、ブラジル支部の団員であるということで、神奈川支部のリーダーから入門クラスへの仲間入りを許され、その練習に参加したのみならず、10月14日の戸塚スポーツフェスティバルでの演技にも出演させてもらっ



た。（写真はその時の様子）

日本支部の活動の様子や舞台裏を見たことで、ブラジル支部との違いや共通点などを実感することができた。

ウチナンチュの経済的、文化的な輪が世界中に広がっていく中で創作エイサーが果たしている役割を深く理解するために、今後はその理論と実践を統合していきたいと思っている。

（GLAUJOR Carlos氏は2007年10月1日～10月17日まで訪問研究員として来日された。）

* ウチナンチュとは沖縄の言葉で「沖縄人」の意味。

* 本稿は英語で提出されたものを藤本真由海（COE支援事務局）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。